

青年期の社会的態度に関する縦断的研究

— 保守的態度，革新的態度に関する質的検討 —

久世敏雄 浅野敬子¹⁾ 後藤宗理²⁾
二宮克美 宮沢秀次³⁾ 宗方比佐子⁴⁾
大野久⁴⁾ 内山伊知郎⁴⁾

I 問題

1972年から約8年間にわたった青年期の社会的態度に関する縦断的調査は「保守的態度」「革新的態度」「大衆社会的態度」という3つの社会的態度枠組にもとづいて実施されてきた。本研究はこれらのうち特に「保守的態度」「革新的態度」の両態度に焦点をあてて検討を加えるものであり、「大衆社会的態度」の側面から分析を行なう次報と、対をなすものである。

一定の社会・文化と深く関与した諸事象を測る尺度は、常に測る側と測られる側とが属する文化・社会的状況と独立しては存在しえない。ここでとりあげる保守的態度と革新的態度とは Thurstone (1934) 以来の態度研究の潮流を背景に持つものであるが、保守的態度が「封建的・権威主義的で、伝統を尊び、義理人情を重んずる。消極的、保守的、国家主義的、家族制度肯定的で男尊女卑的である」ことを示し、革新的態度が「個人の自由尊重、人間の平等を主張し、合理的科学的精神をもつ。労働者階級の連帯観と団結を強調する」ことを指すというように(久世・速水, 1974)、第二次大戦後のわが国における戦前・戦中社会への否定的態度と欧米近代社会モデルへの志向性という時代的雰囲気をも反映している。

1970年代以降、しばしばわが国の青年の保守化傾向が指摘されてきた。このような現代青年把握には、自覚的であるにせよ、無意識的であるにせよ、上記の保守—革新の枠組が働いていると考えられる。1960年代に支配的であったこの保守的態度枠組、革新的態度枠組を手がかり

りとしてみると、1970年代の青年はどのような側面で保守的であり、どのような側面では革新的であるだろうか。これを明らかにすることが本研究の第一のねらいである。

社会的態度の形成過程について検討する場合に保守—革新軸ときり結ぶいくつかの視座が考えられる。家族の構成、そこでの人間関係の成り立ち、そして家族に対する意識・態度は、社会、国家の機構との関わりでしばしば論じられる(川島, 1948, 桜井, 1984)。また性役割観、上下関係を主軸とする人間関係モデルも、「恥」「恩義」「人情」を主調とする人間関係モデルも、いわば「前近代的」社会態度を特色づけるものであったと考えられる。これらは、それぞれが内的な意味連関を持つと同時に相互に関連し合いながら、保守—革新的態度を支えてきたと考えられる。1970年代の青年において、性役割に対する態度、親子関係に対する態度、恥、恩、人情など伝統的人間関係に対する態度、国家そのものを家族的構成の内に位置づけるような態度、政治・社会に対する態度それぞれが、内的意味連関を持っているのか、またそれらの態度は相互に、関連しているのか、このような点について分析することが本研究の第二のねらいである。

II 方法

1 社会的態度の質問紙

社会的態度の質問紙は保守的態度、革新的態度、および大衆社会的態度を測定するために用意されたそれぞれ13項目、計39項目の質問から構成されている(これらのうち、本研究で分析の対象となる保守的態度、革新的態度それぞれ13項目を付表に掲げた)。質問紙は、「非常に賛成」、「賛成」、「賛成とも反対ともいえない」、「反対」、「非常に反対」という5段階評定尺度を用いている。被調査者の各項目への反応は、「非常に賛成」の場合5点、

1) 中京女子大学家政学部助教授
2) 名古屋市立保育短期大学助教授
3) 名古屋経済大学講師
4) 名古屋大学大学院教育学研究科博士課程(後期)

「賛成」の場合4点,「賛成とも反対ともいえない」の場合3点,「反対」の場合2点,「非常に反対」の場合1点を与えて得点化した。項目得点という場合は,この値をさし,数値が大きいほどその態度が強いことを意味する。

2 調査対象と調査時期

被調査者は,名古屋大学教育学部附属中学校および高等学校の生徒である。今回の分析に用いた調査対象は,1972年度に中学に入学し,1977年度に高校を卒業した男女生徒,1973年度に中学に入学し,1978年度に高校を卒業した男女生徒,および1974年度に中学に入学し,1979年度に高校を卒業した男女生徒の3群のうち,中学1年から高校Ⅲ年まで毎年この調査をもれなく受けた男子70名,女子70名の合計140名の生徒である。

調査の実施方法はクラスごとの集団実施によった。また調査時期は各学年の年度末であった。

3 分析方法

(1) 項目得点の平均値の変化パターンおよび平均値の水準 保守的態度および革新的態度の項目得点の各学年での平均値を男女別に算出し,以下のような手続きで,平均値の変化パターンおよび水準の分類をする。

i) 中学1年から高校Ⅲ年までの6つの平均値の最大値と最小値の差が0.5点以上のものを変動項目,0.5点未満のものを安定項目とする。

ii) 変動項目については,中学1年と中学2年の平均値,中学3年と高校1年の平均値,高校Ⅱ年と高校Ⅲ年の平均値を算出し,それぞれを m_1 , m_2 , m_3 とする。 m_1 と m_2 の差, m_2 と m_3 の差が0.25点以上である場合,当該の区間での上昇または下降があったとみなす。前半($m_1 - m_2$ 間),後半($m_2 - m_3$ 間)の少なくとも一方で上昇がみられいづれにおいても下降の認められない項目を変動項目のうちの上昇パターンとし,前半,後半の少なくとも一方で下降がみられいづれにおいても上昇の認められない項目を変動項目のうち下降パターンとする。

iii) $m_1 - m_2$ 間, $m_2 - m_3$ 間で基準値(0.25点)以上の上昇または下降が認められた場合でそれぞれ中学1年から中学3年,高校1年から高校Ⅲ年まででその上昇または下降と逆方向に0.5点以上の変動がみられる場合,およびii)で上昇または下降パターンに分類されない場合は,変動群のうち「その他」のパターンとする。

iv) 中学1年から高校Ⅲ年までの各学年の平均値の最小値が3.5点より大である場合をH水準,最小値が3.0点以上3.5点未満であり最大値が3.0点より大である場合をh水準,最大値が3.0点より大であり最小値が3.0

点未満である場合および最大値,最小値ともに3.0点の場合をM水準,最大値が3.0点以下2.5点以上であり,最小値が3.0点未満である場合をl水準,最大値が2.5点未満である場合をL水準とする。

(2) 個人の項目得点変化パターンおよび,典型的安定個人の項目得点変化パターン 保守的態度項目,革新的態度項目での個人の6年間の項目得点がすべて4点または5点である場合にその個人の項目得点変化パターンをH,1点または2点である場合をL,6年間の項目得点が高い方へのみ変化し,4点または5点に至るものを↗H,低い方へのみ変化し,2点または1点に至るものを↘Lとする。各項目ごとにこれらの項目得点パターンを示す個人の数を出算する。

保守的態度において6年間安定して低水準を示す個人および革新的態度において6年間安定して高水準を示す個人を選び出し(久世ほか,準備中),各々での項目得点変化パターンを調べる。

(3) 項目グループ内での項目平均値および項目得点パターンと項目得点間相関 保守的態度項目,革新的態度項目の双方から,①性役割に関する項目(保守2,保守6,保守13,革新10),②親子関係に関する項目(保守6,保守7,保守13,革新4,革新13),③上下関係対平等意識に関する項目(保守1,保守3,保守8,保守10,革新7),④伝統的人間関係に関する項目(保守5,保守12,革新2,革新3),⑤家族=国家観に関する項目(保守3,保守6,保守11,保守13),⑥政治・社会に関する項目(保守1,保守11,保守12,革新6,革新9)を選び出し,それぞれの項目グループの項目平均値パターン,および項目得点パターンごとの人数,項目間相関係数を示す。その際,保守的態度項目でのH,革新的態度項目でのLはともにC,各々での h , l はともに c とし,保守的態度項目でのL,革新的態度項目でのHはともにR,各々での l , h はともに r とする。同様にして保守的態度項目での↗H,革新的態度項目での↘Lはともに \vec{c} ,保守的態度項目での↘L,革新的態度項目での↗Hはともに \vec{r} とする。また,項目グループを構成する全項目でCである個人,Rである個人,Cおよび \vec{c} , \vec{c} のみである個人,Rおよび \vec{r} , \vec{r} のみである個人を選び出す。

(4) 典型的安定を示す個人の項目グループごとにみた態度傾向 久世ほか(準備中)で提示した事例で,保守的態度が低く,革新的態度が高いというパターンを示しているかまたは一方の態度が変化して保守的態度が低く,革新的態度が高くなる事例(CM1,CF1,CF3,RM1,RM2,RM3)と,一方の態度が中間点(39点)に近く,保守的態度で低く,革新的態度では高いと

ようなパターンを示していない事例（CF2, RM4, RF1）に分けて、項目グループごとの態度の傾向を調べる。分析のポイントは、(3)の分析で明確でかつ項目間に一貫性のある態度傾向が全般的な傾向として示された項目グループにおいて、明確で項目間に一貫性のある態度傾向が示されているか、(3)の分析で矛盾する態度傾向が示された項目グループで、全体の傾向と並行した傾向が見出されるかの2点をこれらの事例で検討することにある。

Ⅲ 結 果

1 保守的態度および革新的態度の項目得点水準でみた特徴 (Table 1, 2)

安定項目からみると、保守的態度として構成された項目のうち項目4（伝統重視）、8（敬語尊重）7（親孝行は子どもの義務）は男女とも高い得点平均値を得ており、一方項目1（政治家任せ）、3（結婚は家柄）、11（天皇は日本の中心）、13（家庭内で父権を強く）、2（女が政治に口だしすべきでない）では、男女とも低い得点平均値を示している。革新的態度として構成された項目はほとんどが、高い得点平均値を得ており、そのうちでも項目1（自由尊重）、3（恩義より筋道）、5（伝統より合理性）、8（男女交際は自由）では特に高い態度得点平均値を示している。一方、項目11（「方角」は信じない）、10（家事の男女平等化）（男子のみ）、12（儀式的簡素化）（女子のみ）では、低い得点平均値しか得ていない。

2 個人の項目変化パターン (Table 3, 4, 5, 6)

個人の得点パターンについてみると、項目平均値の水準が高い項目では全体的にみて、Hパターンや、 \nearrow Hパターンが多く、低い項目ではLパターンが多くみられる。保守的態度の項目7（親孝行は子どもの義務）でのHパターンを示す個人は男女とも比較的多くみられ、項目1（政治家任せ）、3（結婚は家柄）、11（天皇は日本の中心）では男女ともLパターンを示す個人が多くみられる。6年間安定して低い保守的態度を示している個人についてみると、項目1, 3, 11においては、Lパターンを示す（CF1, CF2, CF3, およびCM1の項目3）か、それに準じたパターン（CM1の項目1, 11）を示している。また、項目7ではCF1以外の個人（CM1, CF2, CF3）が（Hパターンではないが）相対的に高い得点水準を示している。革新的態度においては、項目1（自由尊重）、3（恩義より筋道）、5（伝統より合理性）、8（男女交際は自由）は男女ともHパターンを示すものが多く、11（「方角」は信じない）は相対的にHパターンを示すものが少なく、Lパターン

ないし \searrow Lパターンを示すものが多くみられる。6年間安定して高い革新的態度を示す個人についてみると女子の事例（RF1）では項目1, 3, 5, 8すべてでHパターンを示し、項目11では、高い項目得点を維持していない。男子の場合には、項目1, 3, 5, 8のすべてでHパターンを示している個人はみられないが、全体としては高い項目得点水準を維持している。一方項目11では必ずしも低い態度得点を示しているわけではないが、RM2ではやや低く、そのほか項目10でもRM3のように低い項目得点を示す個人もみられる。

3 項目グループ内での態度傾向および項目間関連

(1) 性役割 (Table 7, 8) 性役割に関する項目（保守2, 保守6, 保守13, 革新10）では女子ではすべての項目で平均値の水準は革新的方向（すなわち性役割分業の否定）へ傾いており、すべての項目で革新的反応を示し続ける個人も3事例ある。一方、男子の場合は保守2, 保守6, 保守13では平均値の水準は革新的方向にあるが、項目革新10では保守的方向に傾いており、また全項目で革新的反応を示す個人もみられない。項目間の相関係数をみても（Table 8）、男子では革新10と保守6, 保守13の各項目の間の相関関係は明確ではない。これに対し女子では多くの項目組合せにおいて高い相関関係が得られ、そのうちでも保守13と革新10の項目間の相関が一貫して有意であるのが目立った特徴となっている。

(2) 親子関係 (Table 9, 10) 親子関係に関する項目（保守6, 保守7, 保守13, 革新4, 革新13）では保守7（親孝行は子どもの義務）で男女とも平均値が保守的方向を示し、個人の態度パターンもC（親孝行を義務であると認めるもの）が多くみられるのに対し、他の項目では平均値の水準はすべて革新的方向にある。特に革新13（家庭内で親子は対等）では男女とも強く革新的傾向を示しており個人の態度パターンもRに分類されるものが比較的多い。項目間の相関係数は全般に低く（Table 10）、連関は不明確である。特に保守7と革新13の2項目の関連に着目すると、男子の中学2年生において、有意な正の相関関係（親孝行を肯定するものが同時に親子は対等であるとする）を示している以外は、この2項目間の関連はきわめてうすい。

(3) 上下関係対平等 (Table 11, 12) 家庭外での人間関係の上下、平等に関する項目（保守1, 保守3, 保守8, 保守10, 革新7）では、保守1, 保守3の平均値は安定して革新的水準にあり、革新7も変動はあるが、一貫して革新的な方向を示している。これらに対し、保守8（敬語尊重）では男女とも平均値は保守的方向に傾いている。項目間の相関関係は全般に不安定である。保守

青年期の社会的態度に関する縦断的研究

Table 1 保守的態度項目の態度変化パターンと態度水準

	平均値水準	安 定 項 目	変 動 項 目		
			↗	↘	その他
男女共通	H	4 (伝統) 8 (敬語) 5 (義理人情) 10 (上下関係) 13 (父権) 1 (政治家) 3 (家柄) 11 (天皇)			
	h				
	M				
	L				
男子	H	7 (孝行) 2 (女・政治) 6 (長男) 9 (校則)		12 (恥)	
	h				
	M				
	L				
女子	H	7 (孝行) 12 (恥) 2 (女・政治)		9 (校則)	6 (長男)
	h				
	M				
	L				

H : 最小値 > 3.5 h : 3.5 > 最小値 ≥ 3.0 最大値 > 3.0

M : 最大値 ≥ 3.0 最小値 ≤ 3.0 または 最小値 = 最大値 = 3.0

l : 2.5 < 最大値 ≤ 3.0 最小値 < 3.0 L : 最大値 < 2.5

Table 2 革新的態度項目の態度変化パターンと態度水準

	平均値水準	安 定 項 目	変 動 項 目		
			↗	↘	その他
男女共通	H	1 (自由) 3 (恩義) 5 (合理) 8 (交際) 13 (親子) 4 (正義) 9 (選挙) 11 (方角)	6 (権利)		
	h				
	M				
	L				
男子	H	2 (世間) 12 (儀式) 10 (家事)			7 (先輩)
	h				
	M				
	L				
女子	H	10 (家事) 2 (世間) 12 (儀式)		7 (先輩)	
	h				
	M				
	L				

Table 3 保守的態度項目の態度得点パターン (男子)

項目平均値パターン	項目	個人の変化パターン (頻数)					保守的態度で安定して低水準にある個人の項目得点変化						
		L	↘L	↗H	H	その他	中1	中2	CM1 中3	高I	高II	高III	
安定項目	H	7(孝行)	0	0	3	18	49	4	4	3	4	4	4
	h	4(伝統)	0	1	8	4	57	3	1	1	1	1	1
		8(敬語)	0	2	5	5	58	2	2	3	1	2	2
	M	5(義理人情)	1	6	6	2	55	3	3	1	1	3	1
		10(上下関係)	0	2	11	2	55	1	1	2	4	4	4
	l	2(女・政治)	10	9	0	1	50	1	3	3	2	2	2
		6(長男)	5	9	1	1	54	2	1	2	2	1	1
		9(校則)	7	11	0	0	52	2	1	1	1	1	2
		13(父権)	4	6	2	1	57	2	3	2	3	3	2
	L	1(政治家)	21	3	0	0	46	2	2	1	3	2	3
3(家柄)		22	7	1	0	40	1	1	1	1	1	1	
11(天皇)		22	8	0	0	40	1	3	2	1	1	1	
変動項目	↘	12(恥)	6	8	0	0	56	4	3	3	2	3	3

Table 4 保守的態度項目の態度得点パターン (女子)

項目平均値パターン	項目	個人の変化パターン (頻数)					保守的態度で安定して低水準にある個人の項目得点変化																		
		L	↘L	↗H	H	その他	CF1					CF2					CF3								
							中1	中2	中3	高I	高II	高III	中1	中2	中3	高I	高II	高III	中1	中2	中3	高I	高II	高III	
安定項目	h	4(伝統)	0	2	1	2	65	3	4	4	3	4	3	3	4	3	4	4	5	4	4	4	4	4	4
		7(孝行)	0	0	8	13	49	3	2	3	3	2	3	4	4	4	3	4	5	3	4	4	4	4	4
		8(敬語)	1	1	6	11	51	3	3	3	3	3	3	4	3	4	4	4	4	3	3	4	4	4	4
	M	5(義理人情)	4	5	7	4	50	3	4	3	3	3	2	2	4	3	1	1	2	3	3	3	3	3	3
		10(上下関係)	0	3	9	1	57	3	3	2	2	3	2	2	3	3	5	5	4	4	3	2	2	2	2
	l	12(恥)	7	5	1	0	57	2	1	1	1	1	2	2	2	2	3	2	2	2	2	3	2	2	2
		13(父権)	13	4	1	2	50	2	3	3	2	3	3	3	1	2	4	2	1	3	2	2	2	2	2
	L	1(政治)	19	6	0	0	45	2	1	2	2	2	2	2	1	2	2	1	2	2	2	2	2	1	2
		2(女・政治)	41	1	1	0	27	1	1	1	1	1	1	2	1	2	2	1	2	1	1	1	1	1	1
		3(家柄)	29	4	1	1	35	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	1	2	2	2	2	1
11(天皇)		19	5	1	1	44	2	1	1	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
変動項目	↘	9(校則)	16	8	0	0	46	2	2	2	2	2	2	2	2	1	2	2	2	2	2	2	2	2	
その他	6(長男)	12	8	2	0	48	1	1	1	1	1	1	3	2	2	1	1	1	2	2	2	2	3	1	

8の保守1, 保守3, 革新7の各項目との関係に着目すると、男子では中学3年において、保守3(結婚は家柄)との間に負の有意な相関関係(すなわち、家柄を否定す

るものが、より敬語に対し肯定的である)を示しているほかは有意な高い相関関係は示されていない。女子では中学2年において保守3と、高校1年において保守1(政

青年期の社会的態度に関する縦断的研究

Table 5 革新的態度項目の態度得点パターン (男子)

項目 パターン	項目	個人の変化パターン (頻数)					革新的態度で安定して高水準にある個人の項目得点変化																											
		L	↘L	↗H	H	その他	RM 1			RM 2			RM 3			RM 4																		
							中1	中2	中3	高I	高II	高III	中1	中2	中3	高I	高II	高III	中1	中2	中3	高I	高II	高III										
安定 項目	H	1 (自由)	0	0	2	34	34	4	3	5	5	5	5	5	5	4	4	4	3	3	3	4	5	5	5	5	5	4	4	4	5	3	4	
		2 (世間)	0	0	3	22	45	4	5	4	4	4	4	4	4	4	4	3	3	4	4	4	5	5	5	5	5	4	4	4	4	4	4	
		3 (恩義)	0	0	2	20	48	4	4	5	4	4	4	4	4	4	4	3	4	4	4	4	1	5	4	4	4	5	4	4	4	4	4	
		5 (合理)	0	0	2	18	50	4	4	4	4	4	4	4	4	5	5	5	5	5	5	5	5	3	3	3	3	5	4	4	4	4	4	
		8 (交際)	0	3	5	24	38	5	3	5	4	4	4	4	4	3	3	3	4	4	4	4	5	4	4	5	4	5	5	4	5	4	4	
		13 (親子)	0	0	2	10	58	5	5	5	4	5	5	4	4	4	4	3	3	3	3	3	5	5	3	4	4	5	4	4	3	4	4	
	h	4 (正義)	0	0	1	10	59	3	3	3	3	3	3	3	4	4	3	4	4	3	4	4	5	5	5	5	4	5	3	4	4	3	3	4
		9 (選挙)	0	0	4	3	63	4	3	2	3	3	3	3	4	2	3	3	3	3	3	3	5	4	4	3	4	1	4	3	4	2	3	3
		12 (儀式)	0	0	9	10	51	2	3	3	3	3	4	4	3	4	5	5	5	4	4	4	4	2	3	4	3	1	5	4	4	5	5	4
		M	11 (方角)	1	5	5	3	56	3	3	3	4	4	4	4	3	2	3	3	3	3	3	4	3	3	2	3	5	3	4	4	4	4	3
l	10 (家事)	2	1	6	2	59	4	5	4	4	3	3	3	4	4	4	3	3	3	3	1	3	3	2	3	1	4	4	4	4	4	4		
変動 項目	↗	6 (権利)	0	1	7	7	55	4	4	3	3	4	4	4	2	5	4	4	3	4	4	3	4	4	5	4	5	3	3	3	3	3	3	
	↘	7 (先輩)	0	1	2	32	35	5	5	5	5	5	5	5	5	4	5	5	4	4	4	5	5	5	5	4	5	4	4	4	3	4	4	

Table 6 革新的態度項目の態度得点パターン (女子)

項目 パターン	項目	個人の変化パターン (頻数)					革新的態度で安定して高水準にある個人の項目得点変化						
		L	↘L	↗H	H	その他	中1	中2	RF 1 中3	高I	高II	高III	
安定 項目	H	1 (自由)	0	0	3	35	32	4	4	4	4	4	4
		3 (恩義)	0	1	2	29	38	4	4	4	4	4	4
		5 (合理)	0	1	4	19	46	4	4	4	4	4	4
		8 (交際)	0	0	1	24	45	4	4	4	5	4	4
		13 (親子)	1	2	3	12	52	3	4	3	4	2	4
	h	2 (世間)	0	2	0	11	57	4	3	5	4	5	4
		4 (正義)	0	2	3	6	59	4	4	3	3	3	3
		9 (選挙)	0	1	5	4	60	3	3	3	3	4	4
		10 (家事)	3	2	4	6	55	2	3	3	3	3	4
	M	11 (方角)	7	5	3	3	52	5	5	4	4	4	3
12 (儀式)		3	2	8	8	49	5	4	4	5	5	4	
変動 項目	↗	6 (権利)	0	1	9	5	55	3	2	3	3	2	3
	↘	7 (先輩)	0	3	1	29	37	3	3	4	4	4	4

治家任せ)と高くはないが正の有意な相関関係を示しているが、他の学年においてはこの関係は維持されていない。また革新7との間には中学1年、高校I年においてのみ、有意な正の相関関係が示されている(すなわち、敬語を肯定するものがより、先輩とも議論すべきだと考える)。

(4) 伝統的人間関係 (Table 13, 14) 義理, 人情, 恥, 世間体, 恩などの伝統的な人間関係の原則に関する項目 (保守5, 保守12, 革新2, 革新3)のうち, 革新2 (世間体より社会正義), 革新3 (恩義より筋道)では平均値の水準も革新的方向に傾いており, また保守12 (デモ・ストは恥)でも男子に変動はあるが, 全体の水準は革新

Table 7 性役割関連項目群の得点パターン

性 別	男 子					女 子					
	保守 2	保守 6	保守 13	革新 10	全 項	保守 2	保守 6	保守 13	革新 10	全 項	
平均値水準	r	r	r	c	目	R	r	r	r	目	
個人 の 態 度 パ タ ー ン	R	10	5	4	2	0	41	12	13	6	3
	→	9	9	6	6	0	1	8	4	4	0
	↔	0	1	2	1	0	1	2	1	2	0
	C	1	1	1	2	0	0	0	2	3	0
	その他	50	54	57	59	70	27	48	50	55	67

Table 8 性役割関連項目群の項目間相関係数

	男 子				女 子			
	保守 2	保守 6	保守 13	革新 10	保守 2	保守 6	保守 13	革新 10
保守6	中1	0.09			0.06			
	中2	0.11			0.08			
	中3	-0.15			-0.02			
	高I	0.10			0.20			
	高II	0.26*			0.28*			
	高III	0.39***			0.37***			
保守13	中1	0.12	0.35**		0.27*	0.27*		
	中2	0.15	0.04		0.18	0.08		
	中3	0.02	0.27*		0.48***	0.05		
	高I	0.09	0.09		0.25*	0.03		
	高II	0.15	0.28*		0.41***	-0.01		
	高III	0.37**	0.42***		0.36**	0.41***		
革新10	中1	-0.20	-0.09	0.10	-0.25*	-0.06	-0.27*	
	中2	-0.12	0.15	-0.14	-0.39***	-0.20	-0.29*	
	中3	-0.57**	0.20	-0.10	-0.36**	-0.19	-0.43***	
	高I	-0.14	-0.15	-0.05	-0.08	0.10	-0.48***	
	高II	-0.40***	0.03	-0.13	-0.22	-0.04	-0.48***	
	高III	-0.27*	-0.12	-0.16	-0.39***	-0.19	-0.43***	

* P<.05, ** P<.01, *** P<.001 以下 Table 10, 12, 14, 16, 18も同じ

的方向に傾いている。一方、保守5（義理・人情は世渡りに大切）は平均値の水準としては中庸に位置し、個人の態度パターンをみても保守的方向へ変化するものも革新的方向へ変化するものもともにみられる。項目間の関連は、男子の革新2、革新3の間に隔年で比較的高い有意な相関が出現している以外は全般に低く、不安定である。保守5と他の項目の関連に着目すると、男子では、中学3年に保守5は革新3との間に有意な負の相関を示し、高校I年では、保守12と有意な負の相関関係（すなわち、義理人情を重視するものはデモ・ストを恥と思わ

い）を示すが、高校II年では逆に有意な正の相関関係を示しており一方革新2との間にも有意な正の相関を示している（すなわち、義理・人情を重視するものは世間体よりも社会正義を選ぶ）。しかしこれらの関係は年次的に変化し、きわめて不安定である。女子についてみると、保守5は中学2年で保守12と有意な正の相関を示し、高校II年で革新3と有意な負の相関を示しているのみである。

(5) 家族=国家観 (Table 15, 16) 天皇を中心とした大家族的国家の中に個々の家を階層的に位置づける家族

Table 9 親子関係関連項目群の得点パターン

性 別	男 子					女 子							
	保 守 6	保 守 7	保 守 13	革 新 4	革 新 13	全 項 目	保 守 6	保 守 7	保 守 13	革 新 4	革 新 13	全 項 目	
平均値水準	r	C	r	r	R	目	r	c	r	r	R	目	
個人 の 態 度 パ タ ー ン	R	5	0	4	10	10	0	12	0	13	6	12	0
	ア	9	0	6	1	2	0	8	0	4	3	3	0
	イ	1	3	2	0	0	0	2	8	1	2	2	0
	ウ	1	18	1	0	0	0	0	13	2	0	1	0
	その他	54	49	57	59	58	70	48	49	50	59	52	70

Table 10 親子関係関連項目群の項目間相関係数

	男 子					女 子				
	保 守 6	保 守 7	保 守 13	革 新 4	革 新 13	保 守 6	保 守 7	保 守 13	革 新 4	革 新 13
保守7	中1	0.04				0.43***				
	中2	-0.01				0.12				
	中3	0.24*				0.09				
	高I	0.25*				0.11				
	高II	0.08				0.08				
	高III	0.17				0.16				
保守13	中1	0.35**	0.16							
	中2	0.04	0.06							
	中3	0.27*	-0.10							
	高I	0.09	0.05							
	高II	0.28*	0.13							
	高III	0.42***	-0.02							
革新4	中1	-0.11	-0.04	-0.23						
	中2	-0.29*	-0.04	-0.13						
	中3	-0.04	-0.01	0.12						
	高I	0.06	0.20	-0.06						
	高II	-0.13	-0.02	-0.03						
	高III	0.00	-0.07	-0.06						
革新13	中1	-0.05	0.08	-0.13	-0.16					
	中2	0.17	0.24*	-0.39***	0.26*					
	中3	-0.13	-0.02	-0.07	0.22					
	高I	0.18	0.11	-0.20	0.18					
	高II	-0.02	0.06	0.00	0.26*					
	高III	0.06	-0.02	-0.17	0.24*					

国家的な枠組に関わる項目（保守3，保守6，保守11，保守13）では、平均値の水準はすべての項目で革新的方向に傾いている。個人の項目得点パターンをみても、特に女子ではすべての項目において、革新的方向の反応を6年間にわたって示し続ける個人が多くみられ、4項目すべてで革新的方向を示す個人も4名存在した。また男子でも、革新的方向へ変化して、すべての項目で革新的反応を示すに至る個人が2名存在した。項目間の相関につい

ても、特に女子では多くの項目の組合せにおいて高い有意な相関が認められ、高校Ⅲ年においては、すべての項目の組合せで有意な相関関係が示されている。男子では項目間の相関は全般に不明確であり、特に保守11と保守13の2項目の間の相関は女子では一貫して高いのに対し、男子では低くなっている。

(6) 政治・社会 (Table 17, 18) 政治・社会に関する項目では平均値の水準は、(保守12, 革新6の2項目では

Table 11 上下関係対平等関連項目群の得点パターン

性 別	男 子					女 子							
	保守 1	保守 3	保守 8	保守 10	革新 7	全 項 目	保守 1	保守 3	保守 8	保守 10	革新 7	全 項 目	
平均値水準	R	R	c	M	R	目	R	R	c	M	R	目	
個人 の 態 度 パ タ ー ン	R	21	22	0	0	32	0	19	29	1	0	29	0
	r	3	7	2	2	2	0	6	4	1	3	1	0
	c	0	1	5	11	1	0	0	1	6	9	3	0
	C	0	0	5	2	0	0	0	1	11	1	0	0
	その他	46	40	58	55	35	70	45	35	51	57	37	70

Table 12 上下関係対平等関連項目群の項目間相関係数

	男 子					女 子					
	保守 1	保守 3	保守 8	保守 10	革新 7	保守 1	保守 3	保守 8	保守 10	革新 7	
保守3	中1	0.26*					0.04				
	中2	0.03					0.18				
	中3	0.37**					0.20				
	高I	0.00					0.23				
	高II	0.36**					0.44***				
	高III	0.13					0.23				
保守8	中1	0.07	0.07			-0.06	0.12				
	中2	-0.18	-0.03			0.20	0.33**				
	中3	-0.18	-0.29*			0.05	-0.08				
	高I	0.09	0.10			0.27*	0.04				
	高II	-0.20	0.01			-0.02	-0.01				
	高III	-0.20	-0.07			0.01	-0.16				
保守10	中1	0.08	-0.04	0.06			-0.06	0.24*	0.31**		
	中2	0.19	0.05	0.08			-0.11	0.12	0.06		
	中3	0.20	0.20	0.04			0.14	0.18	0.14		
	高I	0.41***	-0.08	0.26*			0.33**	0.18	0.21		
	高II	0.03	0.18	0.18			0.07	0.07	0.11		
	高III	-0.10	0.11	0.44***			0.14	0.32**	0.25*		
革新7	中1	-0.08	0.13	-0.10	0.22			0.06	0.12	0.25*	-0.18
	中2	0.02	0.09	-0.01	-0.03			-0.27*	0.22	0.00	-0.11
	中3	-0.06	-0.16	0.05	-0.43***			-0.19	-0.14	0.00	0.06
	高I	-0.39***	-0.06	-0.16	-0.32**			-0.15	-0.03	0.25*	-0.03
	高II	-0.21	-0.24*	0.14	-0.04			-0.17	-0.20	0.10	-0.25*
	高III	-0.20	-0.34**	0.09	0.05			-0.26*	-0.14	0.00	-0.21

変動はあるが) すべて革新的方向に傾いている。しかしながら、全項目で革新的パターンを示している個人はみられない。項目間の相関関係についてみると、革新9(政治をよくするには進歩的代議士を)が他のすべての項目と低い相関関係を示しており、また、保守1(政治家任せ)と革新6(デモ・ストは権利)の間の相関も低い。他の項目組合せにおいては比較的高い相関関係が示され

ている。

4 保守的態度および革新的態度で典型的な態度変化パターンを示す個人の項目グループごとにみた態度傾向 (Table 19)

(1) 保守的態度が安定して低く、革新的態度の全体の水準が高い個人 (CM1, CF1, CF3) 男子の事例

青年期の社会的態度に関する縦断的研究

Table 13 伝統的人間関係関連項目群の得点パターン

性別		男子					女子				
項目	平均値水準	保守5	保守12	革新2	革新3	全項目	保守5	保守12	革新2	革新3	全項目
		M	r	r	R	目	M	r	r	R	目
個人の態度パターン	R	1	6	22	20	0	4	7	11	29	0
	r	6	8	3	2	2	5	6	0	2	0
	c	6	0	0	0	0	7	1	2	1	0
	C	2	0	0	0	0	4	0	0	0	0
	その他	55	56	45	48	68	50	56	57	38	70

Table 14 伝統的人間関係関連項目群の項目間相関係数

	男子				女子			
	保守5	保守12	革新2	革新3	保守5	保守12	革新2	革新3
保守12	中1	0.07			0.13			
	中2	-0.01			0.27*			
	中3	-0.08			0.21			
	高I	-0.28*			0.14			
	高II	0.30**			0.09			
	高III	0.10			0.07			
	革新2	中1	0.06	0.02		0.09	-0.05	
中2		0.09	-0.11		0.20	-0.11		
中3		0.03	-0.10		0.00	-0.09		
高I		-0.16	0.06		0.19	-0.31**		
高II		0.27*	-0.11		0.08	-0.24*		
高III		-0.19	-0.13		0.08	-0.20		
革新3		中1	-0.15	0.06	0.15	0.03	0.05	0.16
	中2	0.06	0.06	0.39***	0.05	-0.02	0.12	
	中3	-0.31**	0.12	0.18	-0.07	-0.01	0.10	
	高I	-0.22	0.06	0.49***	-0.06	0.01	0.10	
	高II	0.05	-0.13	-0.03	-0.28*	0.00	0.03	
	高III	-0.15	-0.09	0.37**	0.04	-0.19	0.25*	

CM1, 女子の事例CF1, CF3ともに, 家族=国家観項目グループでは, ほぼすべての項目で革新的な方向でまとまりを示している。また政治・社会に関する項目においても, 女子の事例CF1, CF3では革新的な方向にまとまっている。女子で明確な一貫性を持っていた性役割に関する項目では, CF3では全項目で革新的傾向を示している。CF1では革新10(家事の男女平等化)などで中庸の態度を示している。親子関係の項目グループの中で保守的方向に反応が片寄っていた保守7(親孝行は子どもの義務)では, CM1, CF3が同様の傾向

を示している。上下関係対平等のうちの保守8(敬語尊重)ではCF3が同様の傾向を示している。

(2) 革新的態度が安定して高く, 保守的態度の水準が低下する個人(RM1, RM2)および全体の水準が低い個人(RM3)家族=国家観の項目グループではRM2, RM3の事例でまとまりのある革新的な態度を示しており, 政治・社会に関する項目グループのうち革新9をのぞく諸項目でも中学2年以降は革新的な方向にまとまった態度を示している。保守7(親孝行は子どもの義務)では3事例とも保守的方向の態度を示している。また保

Table 15 家族=国家観関連項目群の得点パターン

性別		男 子				女 子					
項 目		保 守 3	保 守 6	保 守 11	保 守 13	全 項 目	保 守 3	保 守 6	保 守 11	保 守 13	全 項 目
平均値水準		R	r	R	r	目	R	r	R	r	目
個人 の 態 度 パ タ ー ン	R	22	5	21	4	0	29	12	19	13	4
	r	7	9	8	6	2	4	8	5	4	0
	c	1	1	0	2	0	1	2	0	1	0
	C	0	1	0	1	0	1	0	1	2	0
	その他	40	54	41	57	68	35	48	45	50	66

Table 16 家族=国家観関連項目群の項目間相関係数

		男 子				女 子			
		保 守 3	保 守 6	保 守 11	保 守 13	保 守 3	保 守 6	保 守 11	保 守 13
保守6	中1	0.26*				0.35**			
	中2	0.29*				0.15			
	中3	0.28*				0.21			
	高I	0.20				0.34**			
	高II	0.25*				0.49***			
	高III	0.27*				0.41***			
保守11	中1	0.09	0.23			0.13	0.13		
	中2	0.06	0.19			0.09	0.29*		
	中3	0.03	-0.03			0.25*	0.18		
	高I	0.07	0.19			0.39***	0.26*		
	高II	0.45***	0.25*			0.28*	0.25*		
	高III	0.18	0.20			0.30*	0.33**		
保守13	中1	0.34**	0.35**	0.27*		0.18	0.27*	0.38***	
	中2	0.08	0.04	0.16		0.15	0.08	0.37***	
	中3	-0.12	0.27*	0.15		-0.04	0.05	0.32**	
	高I	0.05	0.09	0.27*		0.18	0.03	0.34**	
	高II	0.18	0.28*	0.11		0.20	-0.01	0.37**	
	高III	0.16	0.42***	0.21		0.29*	0.41***	0.39***	

守8（敬語尊重）でもRM2；RM3では保守的方向の態度を示している。

(3) 保守的態度が安定して低く、革新的態度は高くない個人（CF2） CF2では政治・社会の項目グループの革新9をのぞいた項目では革新的態度を示している。しかし、「親子関係」の保守7、「上下関係対平等」の保守8ばかりでなく、「性役割」の革新10をはじめ、多くの項目で保守的傾向を示している。

(4) 革新的態度が安定して高く、保守的態度は低水準を示していない個人（RM4、RF1） RM4、RF1

ともに、家族=国家観に関する項目での反応傾向も、政治・社会に関する項目での反応傾向も不明確である。

IV 考 察

1 1960年代を基礎に置く保守的態度、革新的態度枠組からみて、この被調査者グループは、どのような特質を示しているか

保守的態度では全体として、「親孝行」「伝統」「敬語」の重視等の項目で保守的傾向を示し、「政治家任せ」の容認、「家柄」「天皇」の重視など、直接身分差別、不

青年期の社会的態度に関する縦断的研究

Table 17 政治・社会関連項目群の得点パターン

性別		男子					女子						
項目	平均値水準	保守1	保守11	保守12	革新6	革新9	全項目	保守1	保守11	保守12	革新6	革新9	全項目
		R	R	r	r	r	目	R	R	r	r	r	目
個人の態度	R	21	22	6	7	3	0	19	19	7	5	4	0
	r	3	8	8	7	4	0	6	5	6	9	5	0
	c	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1	2	0
	C	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
その他		46	40	56	55	63	70	45	45	56	55	59	70

Table 18 政治・社会関連項目群の項目間相関係数

	男子					女子					
	保守1	保守11	保守12	革新6	革新9	保守1	保守11	保守12	革新6	革新9	
保守11	中1	0.06					0.34**				
	中2	0.11					0.08				
	中3	0.24*					0.38***				
	高I	0.38***					0.34**				
	高II	0.28*					0.23				
	高III	0.31**					0.44***				
保守12	中1	0.23	0.36**				0.31	0.20			
	中2	0.14	0.46***				0.13	0.43***			
	中3	0.24*	0.07				0.16	0.12			
	高I	0.12	0.08				0.33**	0.52***			
	高II	0.30*	0.35**				0.32**	0.29*			
	高III	0.25*	0.54***				0.42***	0.45***			
革新6	中1	-0.23	-0.05	-0.40***			0.03	-0.23	-0.55***		
	中2	0.18	-0.35**	-0.50***			-0.36**	-0.43***	-0.45***		
	中3	0.14	-0.02	-0.27*			-0.27*	-0.25*	-0.59***		
	高I	-0.14	-0.07	-0.62***			-0.10	-0.36**	-0.54***		
	高II	-0.13	-0.32**	-0.65***			-0.07	-0.21	-0.46***		
	高III	-0.11	-0.32**	-0.50***			-0.22	-0.29*	-0.43***		
革新9	中1	-0.25*	0.16	0.09	-0.04		-0.26*	0.05	0.03	-0.16	
	中2	-0.23	-0.17	0.03	0.04		-0.26*	-0.10	0.09	0.19	
	中3	0.18	-0.06	0.20	0.19		0.04	-0.24*	-0.25*	0.19	
	高I	-0.20	-0.27*	0.17	0.03		-0.01	-0.18	-0.10	0.02	
	高II	0.00	-0.18	-0.11	0.09		0.04	-0.05	-0.05	0.01	
	高III	-0.09	-0.04	0.10	0.04		-0.21	-0.19	-0.35**	0.25*	

平等につながる項目では反保守的傾向を示している。保守的態度で安定して低い得点を示している個人においても「政治家任せ」「家柄」「天皇」に対する否定的な傾向は表われており、また男子では「親孝行」女子では「伝統」に対する肯定的な傾向も示されている。

革新的態度では全体の傾向としては自由、筋道、合理性の重視などにその特質が現われており、特に筋道、合理性の重視は革新的傾向の安定している事例にほぼ共通してみられる特色となっている。一方、「方角」の否定、

家事の男女平等化（男子）、儀式の簡素化（女子）などは全般的傾向としては高い支持を得ておらず、革新的傾向の高い事例の内でも、これらに対し否定的な反応を示す個人もいた。

保守、革新を通してみると、この被調査者グループは、平等、合理性、筋道など、革新的原則において、「革新」的傾向を示し、親孝行、敬語、「方角」、家事での性役割など、日常生活での伝統的様式を受容という点で「保守」的な傾向を示しがちであるといえよう。

2 項目グループ別にみて、社会的態度に、どのような質的变化が想定されるか

(1) 変化のずれ 家族=国家観、政治・社会、性役割(女子の場合)については態度は革新的な方向ではば一貫し、まとまりを持っていると考えられるが、一方親子関係、上下関係対平等、伝統的人間関係、性役割(男子の場合)に関しては態度の一貫性が弱く、いわゆる「保守」的な態度が部分的に介入してきている。このことは、これらの親子関係、上下関係対平等、伝統的人間関係などと、家族=国家観、政治・社会など抽象的・普遍的なパースペクティブを持つ事柄との間に、態度のずれが生じているばかりでなく、前者の比較的日常的で身近な問題に関する態度では、後者にはみられない、態度の質的な変化が進行していることを示唆するものである。

(2) 日常的な、身近な問題に関する態度にみられる質的な変化 態度グループ内での態度の非一貫性を、態度の水準の側面からみると、性役割(男子)では家事の男女平等化と政治状況や親子関係での男女差別対平等の間に、親子関係では親孝行を義務とみなすことと親子関係を上下関係とみなすこととの間に、上下関係対平等では敬語の使用と身分差別観の間に、伝統的な人間関係では義理・人情の重視と、筋道を通すことよりも恩義を重視することの間に顕著なずれが認められ、態度間の相関からみても、それらの関係は不明確または不安定である。こうした態度グループ内での態度の非一貫性の背後にあるものを正確に指摘するには、ここでの資料は不十分であるが、いくつかの可能な視点を提示してみよう。まず第一に考えられるのは一定の事象群に対して働く認知的統合化の範囲の問題である。(1)で指摘したのと同様、抽象的普遍的なパースペクティブを持つ事柄と、より日常的で身近な、それがゆえに意識化されにくい事柄との態度の認知的統合化にずれが生じ、前者での統合が後者に及んでいかないことは、たとえば理念的、原則的水準での男女平等受容と、家事の男女平等の承認とのずれを説明するひとつの視座になりうるだろう。このような理念の領域と日常生活の領域との二重性については、外来文化の移入と日本的なるものの温存というシエマでしばしば論じられてきている。そのほか、事柄の内包的な意味がまったく変わってしまっている可能性もある。たとえば親孝行は、親(祭祀の対象となる祖先も含め)を上位に置く家族構図と結びついてはいたはずであるが、そのようなニュアンスを喪失して、両親との親和的な関係を指したり、金銭的な貸借関係とのアナロジーで受けとられている可能性がある。敬語に関しても同様に、単なる親和的な感情の表出として受けとられたり、人間関係の表層的な技術の問題として受けとられたりしている可能性が

ある。

3 まとめ

ここで得られた主要な結果は、青年における「平等意識」の亢進を示している。それは国家の水準から学校、社会、家庭のすべての領域に及んでいる。日常生活水準での行動様式の受容が、この主要な傾向とのかかわりで様々な変容を受けながら、進行しているという点が、現代青年の社会的態度を保守、革新の二項対立の図式からみてみた場合の特徴であろう。

戦後社会において、物質的幸福の実現と社会的平等化が主たるスローガンになってきたこと(日高, 1980, 西部, 1983),そして達成すべき社会モデルが欧米のそれに求められたことは、敗戦と貧困と、戦争中の上下関係を軸とした人間関係とが結びつけられ、これらの対極にあるものとして欧米の社会がとらえられたことと関係しているだろう。しかしながら、欧米社会をモデルとしたということは、欧米と同一の社会がわが国に実現したことを意味するわけではない。柳父(1982)は明治以来、わが国では西洋文化の移入に際して、特定の社会概念をそれがよって立つ西洋社会のダイナミズムの内から切り離して「カセット化」し、わが国にそれまでに存在したシエマの中に取り込みながら、しかも「舶来」の「価値あるもの」として崇め尊重するという異文化受容パターンを示してきたことを指摘している。これと同様の欧米文化移入の形が、戦後社会においても存在したと思われる。

文 献

- 日高六郎 1980『戦後思想を考える』岩波書店
 川島武宜 1948『日本社会の家族的構成』学生書房
 久世敏雄・浅野敬子・後藤宗理・二宮克美・宮沢秀次・宗方比佐子・大野 久・内山伊知郎(準備中) 青年期の社会的態度に関する縦断的研究——個人の変化過程の分析——
 久世敏雄・速水敏彦 1974 中学生・高校生の社会的態度に関する研究(1) 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 21, 1—11.
 西部 邁 1983『大衆への反逆』文芸春秋社
 桜井哲夫 1984 家族の三角形——〈関係〉の再生のために——中央公論 99(5), 62—77.
 Thurstone, L. L. 1934 Vectors of mind. *Psychological Review*, 41, 1—32.
 柳父 章 1982『翻訳語成立事情』岩波書店
 (1984年7月31日 受稿)

Table 19 項目群別にみた個人の態度変化

事例	項目 グループ 学年	性役割			親子関係			上下関係			伝統的人間関係			家族=国家観			政治・社会									
		保守 2	保守 6	革新 13	保守 7	保守 13	革新 4	保守 6	保守 7	保守 8	保守 10	革新 7	保守 5	保守 12	革新 2	革新 3	保守 3	保守 6	保守 11	保守 13	保守 1	保守 11	保守 12	革新 6	革新 9	
CM1	中1	R	I	C	I	C	I	I	R	R	R															
	中2		R	R	R	C	I	I	R	R	R															
	中3		I	I	I		I	R	R	R	R															
	高I	I	I		I	C	R	C	I	R	C	I	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	
	高II	I	R	C	R	C	R																			
	高III	I	R	I	R	C	I	I	R	R	C	I	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	
CF1	中1	R	R	I	R	I	I	I	R	R	I	I														
	中2	R	R		R	I	I	R	R	R	R															
	中3	R	R		R			R	R	R	I															
	高I	R	R	I	R	I	I	R	R	R	I															
	高II	R	R		R	I	I	R	R	R	I															
	高III	R	R		R		I	R	R	R	I	I														
CF3	中1	R	I	I	I		I	I	R	R	C	I	I	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	
	中2	R	I	I	I	C	I	I	I	C	I	I	I	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	
	中3	R	I	I	I	C	I	I	I	C	I	R														
	高I	R	I	I	I	C	I	I	I	C	I															
	高II	R	I	I	I	C	I	I	R	R	C	I	I	I	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	
	高III	R	R	I	R	C	I	I	I	R	C	I	I	I	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	
CF2	中1	I	I	C			I	I	R	R	C	I	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	
	中2	R	I	R	I	C	C	C	R	R	C	C	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	
	中3	I	I	I	I	C	C	C	I	R	C	C														
	高I	I	R	C	R	C	C	C	R	R	C	C	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	
	高II	R	R	I	R	C	I	C	C	R	C	C														
	高III	I	R	R	R	C	C	C	R	R	C	C														

付 表

保守的態度項目

- 1 国の政治は政治家にすっかりまかせた方がよい。
- 2 女が政治などに口だしすべきでない。
- 3 結婚は家柄を重んじなければならない。
- 4 伝統や習慣は尊重すべきである。
- 5 世間をわたるには義理や人情が最も大切である。
- 6 長男が家をつぐのは当然だ。
- 7 親孝行は子どもの義務である。
- 8 目上の人にはもっと敬語を使った方がよい。
- 9 学校で定めている校則にはどんな場合にも従うべきである。
- 10 世の中の秩序を守るために上下関係はなくてはならない。
- 11 日本は天皇を中心にまとまるべきである。
- 12 デモやストでさわぐのは民主国家の恥である。
- 13 家庭では父親がすべての実権をにぎるのが望ましい。

革新的態度項目

- 1 個人の自由は尊重すべきである。
- 2 正しいことであれば世間体など気にすべきではない。
- 3 いくら恩義のある人でも筋道のとおらない頼みごとは断った方がよい。
- 4 社会のために正しいことであるなら親の反対をおしきっても行動すべきである。
- 5 いくら伝統だからといっても不合理なことはやめるべきである。
- 6 デモやストをするのは労働者の当然の権利である。
- 7 先輩の意見でも、まちがっていると思えば、納得できるまで議論する。
- 8 男女の交際は全く自由であり、まわりの人がとやかく言うべきでない。
- 9 政治をよくするためには、もっと進歩的な人から多くの代議士を選出すべきである。
- 10 家庭内の仕事は男女平等に分担すべきである。
- 11 「方角が悪い」などということはまったく信用しない。
- 12 結婚式などの儀式はなるべく簡素化するのがよい。
- 13 家庭では子どもの意見も大人の意見と同等に尊重されるべきである。

ABSTRACT

A LONGITUDINAL STUDY OF SOCIAL ATTITUDES OF ADOLESCENTS
— Conservative and Radical Attitudes in 1970'S Upper and Lower Secondary School Students —

Toshio KUZE, Keiko ASANO, Motomichi GOTO, Katsumi NINOMIYA, Shuji MIYAZAWA,
Hisako MUNEKATA, Hisashi OHNO and Ichiro UCHIYAMA

The purpose of the present study is to describe the conservative and the radical attitudes of 1970s' adolescents by using 1960s' frameworks of social attitudes in Japan. This study has two plans of analysis; the first is to present the characteristics which the adolescents have in their conservative and radical attitudes, the second is to examine the individual attitude consistencies among the groups titled as 'sex-role', 'parent-child relationship', 'hierachical interpersonal relationship', 'traditional interpersonal relationship', 'nationalistic thought of family system', and 'socio-political problem', the items of which are selected from the ones of conservative and radical scales.

Both the conservative and the radical attitude scales have 13 items. The subjects consisted of 70 boys and 70 girls in upper and lower secondary school affiliated to the Faculty of Education of Nagoya University. The longitudinal data were collected by monitoring once a year the same group of students. They started the school in three different years (in 1972, 1973, 1974) and graduated 6 years later (in 1977, 1978, 1979, respectively), but they were combined into a single group.

Major results of the analysis are summarized as follows.

- (1) From the analysis of the characteristics of the conservative and radical attitudes; many subjects have conservative attitudes in the acceptance of traditional life style (filial piety, honorific words, etc.). On the other hand, in the acceptance of the fundamental principles of democracy (liberty, egalitarianism, etc.), they have radical attitudes.
- (2) From the analysis of individual attitude consistency toward the item groups; consistencies are generally found among 'socio-political problem', and among 'nationalistic thought of family system'. On the contrary, among 'parent-child relationship' and among 'hierachical interpersonal relationship', inconsistencies are observed.